

研究ノート

『スーダン遺跡紹介』 第6回 クッル (El-Kurru) その1

坂本麻紀 (アラブ調査室研究員)

はじめに

スーダン遺跡紹介の6回目は、ユネスコ世界遺産「Gebel Barkal and the Sites of the Napatan Region」の1つ、ナイル川第4急湍のナパタ地域にあるクシュ王国 (Kingdom of Kush) の王墓地クッル (El-Kurru) を紹介します。

この遺跡は紀元前8世紀に古代エジプトを支配し、エジプトの歴史では第25王朝 (クシュ朝; 714-656 BCE¹) と呼ばれる王朝を築いたクシュ王国の王たちの墓地として有名です。これまでアラブ調査室の「スーダン遺跡紹介」で何度かお伝えしましたが、古代のスーダンの領域を指す言葉として研究者は「ヌビア (Nubia)」という用語を使用しており、そのヌビアの歴史では、第25王朝のクシュ王たちはナパタ期 (1000-300 BCE²) に属します。ナパタ期のクシュ王国の王墓地は、クッルの他にヌリ (Nuri) というタハルカ (Taharqa) 王が新たに造営した墓地がありますが、ヌリは別の機会に紹介します。

クッルの重要性は、第25王朝に属する王や王妃の墓があるだけでなく、彼らの墓とは異なる古い型式の墓があることです。エジプトの第25王朝を成立させたクシュ王国については、ナパタ地域を拠点として発展したとされますが、いつ頃どこで興ったのか、いまだにはっきりしません。しかし、断片的に確認できる資料などから、おそらく紀元前1000年頃からナパタ地域で徐々に力をつけていったのではないかと考えられています。その根拠の1つが、クッルの古い型式の墓であり、第25王朝の王たちに先行する人々の墓ではないかと考えられています。

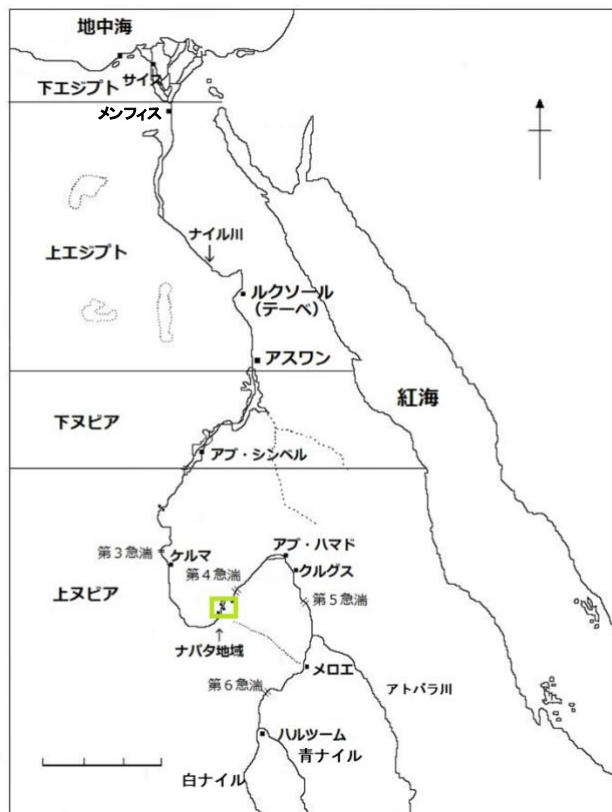
まず第25王朝について簡単に説明し、クッルの遺跡の立地や、どのような人々の墓があるのかなど具体的に見ていきたいと思います。尚、特に注記がない写真は全て筆者が撮影したのですが、図版などは適宜出典を示します。



図1 El-Kurru

(西側より遺跡を臨む)

※緑地の先にナイル川がある



? - 744 BCE カシュタ (Ku.8)
744 - 714 BCE ピアンキ (Ku.17)

第 25 王朝

714 - 705 BCE シャバタカ (Ku.18)
705 - 690 BCE シャバカ (Ku.15)
690 - 664 BCE タハルカ (Nu.1)
664 - ?656 BCE タヌタマニ (Ku.16)

表 1 クシュ王の王名と治世年、墓番号
(治世年は Payraudeau 2014, p.13 と
Pope 2019, Fig.5 参照)

図 2 エジプト・ヌビア地図

1. 古代エジプト第 25 王朝とは

エジプトの南に位置するヌビアは、紀元前 3000 年頃に始まる古代エジプトの王朝時代を通じて、エジプトとアフリカの南の地域をつなぐ交易の中継地点という役割と、金や銅などの天然資源を産出する重要な地域でした。そのため、古代エジプトの中王国時代 (2055-1650 BCE) や新王国時代 (1550-1069 BCE) には、エジプトの領土拡大政策の影響により、ヌビアはエジプトの支配を受けることになります。しかし、新王国時代の中央集権制が崩壊し、エジプト国内が第 3 中間期 (1069-656 BCE) と呼ばれる混乱期に入ると、エジプト側のヌビアの情報は途絶えます。暗黒時代ともいわれる状況の中、上ヌビアのナイル川第 4 急湍のナパタ地域を拠点とするクシュ王国が勢力を拡大し、上エジプトを手中に収め、クシュ王ピアンキ (Piankhy もしくはパイ Piye) の治世 21 年に (紀元前 730 年頃か)、下エジプトの勢力を制圧します。そしてピアンキの次のクシュ王の時期にエジプトを統一し、ヌビア人によるエジプトの王朝「第 25 王朝」が始まります。

クシュ王国によるエジプト支配は長く続きませんでした。クシュ王たちは歴代のエジプト王と同じように、上下エジプト王の名前を持ち、エジプトのシステムに基づいて統治を行い、エジプト国内で立場が弱まっていたアメン神を国家神として復活させ、敵対していたアッシリア帝国からエジプトを守るために戦いました。また、エジプト国内だけでなくヌビアの地でもエジプトの神々の神殿を建立するなど、ヌビア地域社会にエジプト文化を積極的に導入し、ヌビアの伝統的な埋葬様式とエジプトの埋葬様式を組み合わせた新しい埋葬様式を生み出しました。今日、スーダンで見られるピラミッドは、第 25 王朝の基礎を築いたピアンキが自らの墓にピラミッドを造ったことに始まると考えられています。

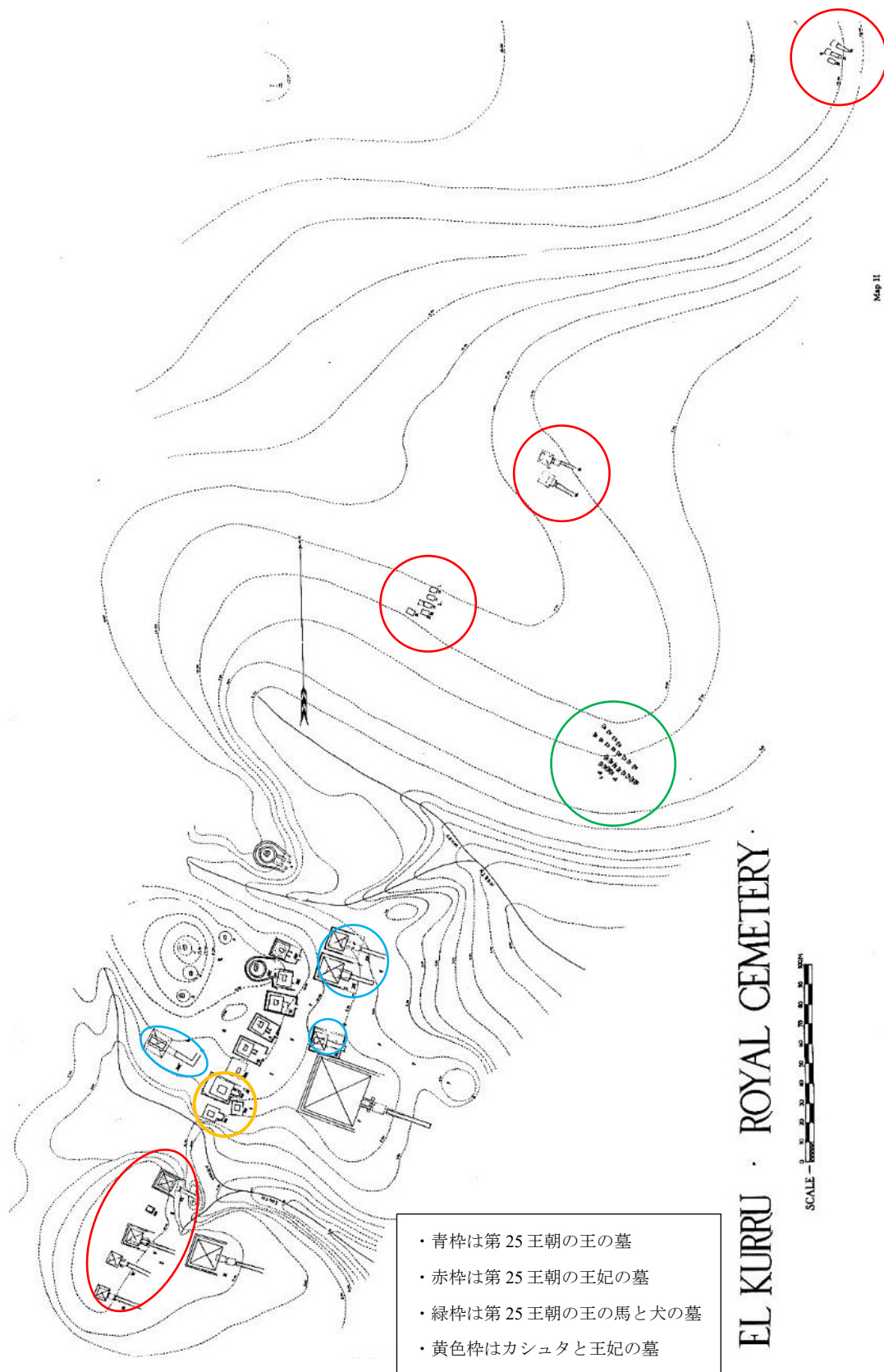


図 3 クッル遺跡全体図 (Dunham 1950, Map 2 改編)

2. 遺跡の立地

スーダンの首都ハルツームで青ナイルと白ナイルは合流し、ナイル川は地中海へ向かって北上しますが、第5～4急湍の間のアブ・ハマドの辺りで大きく蛇行し、その流れは北東から南西へと変わります。この流れは第4急湍の先でまた南から北へと変わり、その後ナイル川は北上を続けながらエジプトを通して地中海へと達します。

古代エジプト人にとってナイル川が南から北へ流れることは当然であり、このナイル川の流れを前提として、ナイル川の右側（東岸）を日が昇る所＝生者の住む土地、左側（西岸）を日の沈む所＝死者の住む土地と考えるなど、ナイル川はエジプト人の死生観と密接に結びつく存在でした。

しかし、第25王朝のクシュ王たちの本拠地であるナパタ地域は、ナイル川第4急湍の南西に位置し、エジプト人の常識とは異なり、ナイル川が北東から南西へ流れる地域となっています。そのため、ナイル川の右側は地理的には西に位置し、ナイル川の左側は東に位置するなど、同じナイル川流域とはいえ、エジプトとは立地環境が全く異なるナパタ地域で、第25王朝のクシュ王たちはエジプトのアメン神を崇拝し、エジプトの埋葬様式を取り入れた墓を築くことになります。

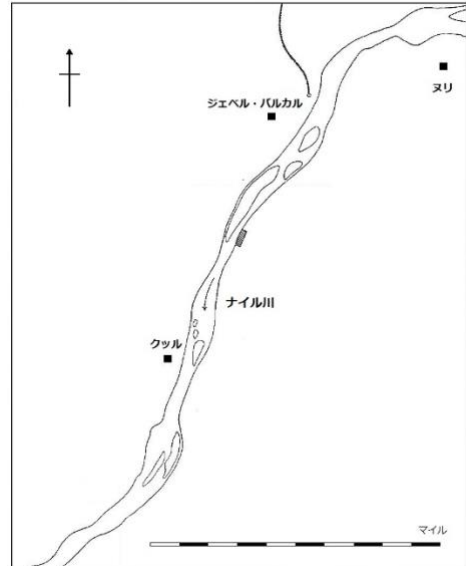


図4 ナパタ地域
(Dunham 1950, Map 1 改編)

ナパタ地域の中心は、エジプトの国家神であるアメン神が住む聖なる山として崇拝された「ジェベル・バルカル (Jebel Barkal)」です。そのジェベル・バルカルから南西へ15kmほど下ったナイル川の右側（地理的には西側）に、クッルは位置しています。



図5 ジェベル・バルカルとナイル川 ※右はジェベル・バルカル全景（南西から）

クッルはアメリカの考古学者ライスナー (George Andrew Reisner) 率いるハーバード大学・ボストン美術館の合同調査隊が1916年から1923年にかけて行った大規模なクシュの王墓地調査の一つとして、1918年から1919年に発掘調査が行われました。ライスナーは

クッルの発掘調査報告書を出版する前に亡くなってしまいましたが、ボストン美術館のダナム（Dows Dunham）が報告書をまとめ、発掘から 30 年以上たった 1950 年に「The Royal Cemeteries of Kush Vol.1; El-Kurru」を出版しました。クッルは 2013 年から「International Kurru Archaeological Project (IKAP)」によって再び調査が開始され、砂やゴミが堆積した墓のクリーニングや、タヌタamani王（Tanutamani, Ku.16）やその母カルハタ（Qalhata, Ku.5）の墓の壁画の保存修復、ライスナーの時期に簡単な調査しか行われなかったピラミッド（Ku.1）の本格的な発掘調査、ライスナーのフィールドノートに記されていた葬祭神殿や、キリスト教時代の村の周壁の調査などが行われています³。

発掘調査報告書によると、クッルには第 25 王朝の始祖といわれるクシュ王ピアンキの墓（Ku.17）を始め、タハルカを除く歴代の第 25 王朝の王、シャバタカ（Shabataka, Ku.18）、シャバカ（Shabaka, Ku.15）、タヌタamaniと彼らの王妃たち、ピアンキの前王として碑文などからその名が知られているカシュタ（Kashta, Ku.8）、墓の型式から第 25 王朝に先行すると考えられる人々の墓、そして馬や犬の墓など、70 基ほどの墓が見つっています。

主要な墓はナイル川から 500m ほど西へ入った砂岩の台地の 250m×150m の範囲に集中していますが、第 25 王朝の王妃の墓うち、10 基ほどが 200m～500m ほど北へ離れた場所（3カ所）で見つっています。同様に主要な墓のあるエリアから 200m ほど北東に離れた場所で、第 25 王朝の王たちの馬の墓 24 基と犬の墓 2 基が見つっています。

クッルはクシュ王国にとって非常に重要な遺跡ですが、現在、私たちが実際に見学できる墓はそれほど多くありません。遺跡の中で一番目立つのは、第 25 王朝の時期より後のナパタ末期（紀元前 4 世紀末頃）に造られたと考えられる大きなピラミッド（Ku.1）ですが、この遺跡の目玉は第 25 王朝最後の王タヌタamaniと、その母カルハタの墓に描かれた壁画です。



図 6 Ku.1 のピラミッド（左）とタヌタamaniの墓（Ku.16）の壁画（右）

3. 被葬者と年代

クッルの主要な墓が集中する台地は、ワディで南北に分かれた 2 つの低い丘陵から成り、北側の丘陵には第 25 王朝の王とその関連する人物の墓、そして第 25 王朝とのつながりは分かりませんが第 25 王朝より古い型式の墓があります。また南側の丘陵には第 25 王朝の王妃たちの墓があります。北側と南側の丘陵には大型のピラミッド（Ku.1 と Ku.2）が

1 基ずつ築かれ、Ku.1 に関しては、ライスナーの部分的な調査では第二の埋葬室（途中）までしか確認されませんでした。2014 年の再調査によって埋葬室が3つあること、コフィンベンチの存在、墓は未完成で使用されなかったことなどが明らかになりました。また、建造年代に関しても Ku.1 に附属する神殿の壁画がナパタ期最後の王ナスターセン（Nastasen, 305-325 BCE）の墓（Nu.15）の神殿のものと似ていることから、メロエ期（BCE 300-350 CE）の墓より早い時期（4 世紀末頃）のものとされています⁴。

一般的には第 25 王朝の基礎を築いたピアンキの時代にエジプトの埋葬様式がクシュの墓に取り入れられたと考えられています。それは墓の上部構造にピラミッドが採用されたこと、下降階段で埋葬室へアクセス可能になったこと、遺体がミイラ処理されたこと、副葬品の中にカノポス壺（ミイラ処理の際に体から取り除かれた内蔵を納める容器）やシャブティ（あの世で主人に代わって労働を行う人形）など、エジプトの墓で見られる品がクシュの墓で見られるようになったことなどが、エジプトの埋葬様式を反映するものとして挙げられます。

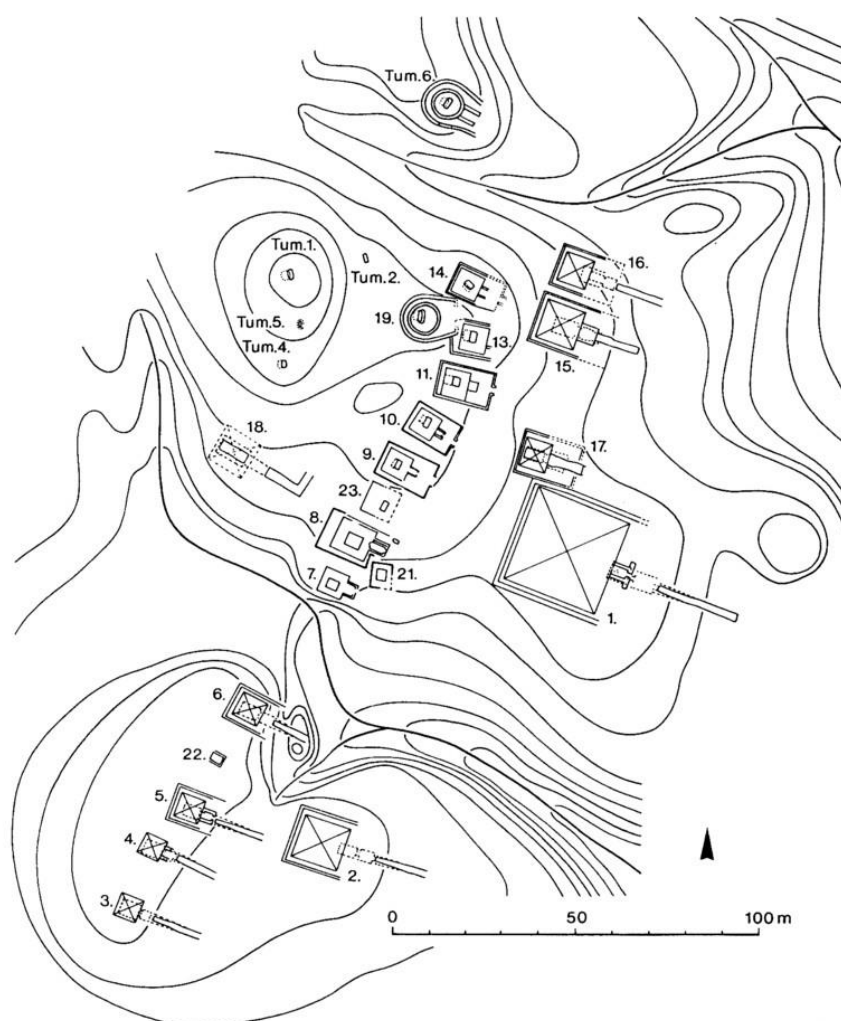


図7 クッルの主要な墓の分布図と墓番号（Török 1997, Fig.3）

発掘者のライスナーはクシュの王墓地の墓の年代を決める際、「世代 (Generation)」という分け方をしており、クッルの場合は 11 の世代 (Generation) に分けられました。この世代という分け方は、ナパタ期の王墓地「クッル」、「ヌリ」、そして以前紹介したナパタ期からメロエ期の墓地「メロエ南墓地」と「西墓地」、メロエ期の王墓地「メロエ北墓地」に共通しています。基本的に王の治世を 1 世代と考えており、ピアンキの父カシュタの墓を第 1 世代 (Generation 1) とし、それより古い時期の墓を A から E の 5 つの世代 (Generation A,B,C,D,E)、ピアンキからタヌタマニまでを第 2 世代から第 6 世代としました。研究者のケンダル (Timothy Kendall) は、ライスナーの未発表のフィールドノートや墓の型式、出土遺物などを基にクッルの報告書で示された世代の再構築を行いました⁵。クッルの発掘調査報告書では、カシュタの前王として名前だけが知られるアララ (Alara) という人物の墓は特定されていませんが、ケンダルは Ku.9 をアララの墓とし、このアララの時期を第 1 世代としています。アララに先行する人々については、ケンダルは男性と女性のペア 1 組で一世代と考え、A から E 世代の設定を行っています。

第 25 王朝に関しては、エジプト側の文字資料や、敵対していたアッシリア側の文字資料に加え、ヌビアでもエジプトのヒエログリフを用いて碑文などが作られたため、王たちの治世年や年代などの情報がありますが、第 25 王朝より前のヌビアに関しては、紀元前 1069 年にエジプトの中央集権制が崩壊し、第 3 中間期という混乱期に入るため、クシュ王ピアンキが下エジプトの勢力を制圧したという通称「戦勝碑 (JE48862)」(Great Triumphal Stela もしくは Victory Stela) が出るまで、約 300 年間ヌビアの状況が分からない状況となっています。

そのためライスナーによって A から E 世代に割り当てられた墓の被葬者と、第 25 王朝の王たちとの関係を直接示す証拠は見つかっていませんが、A から E 世代の人々を第 25 王朝の王たちの先祖と考える研究者も多く、その始まりの年代をいつに設定するかで現在も議論が続いています⁶。

4. 墓の型式

① 上部構造

発掘調査報告書ではピアンキの時期 (第 2 世代) から墓の上部構造にピラミッドが造られるようになり、それ以前の墓の上部構造については、単純な墳丘墓 (Ku.Tum.1, Ku.Tum.4, Ku.Tum.5) →馬蹄形の周壁を持ち表面が石で覆われた墳丘墓 (Ku.Tum.6, Ku.19, Ku.Tum.27) →周壁を持ち墳丘とマスタバが組み合わされた墓 (Ku.14) →周壁を持つ正方形のマスタバ、へと発展したと考えられています。

ライスナーの未発表のフィールドノートなどをもとに墓の上部構造の検討を行ったケンダルによれば、「単純な墳丘墓」は、ヌビアの C グループ文化 (2500-1500 BCE) の墓と同じく、上部が平らで低い円柱形の上部構造であったとしています⁸。またケンダルは「墳丘とマスタバが組み合わされた墓」について、マスタバとドームの複合墓であった可能性を示し⁹、さらに「正方形のマスタバ」はマスタバの上にピラミッドが載っていた¹⁰、という見解を示しています。

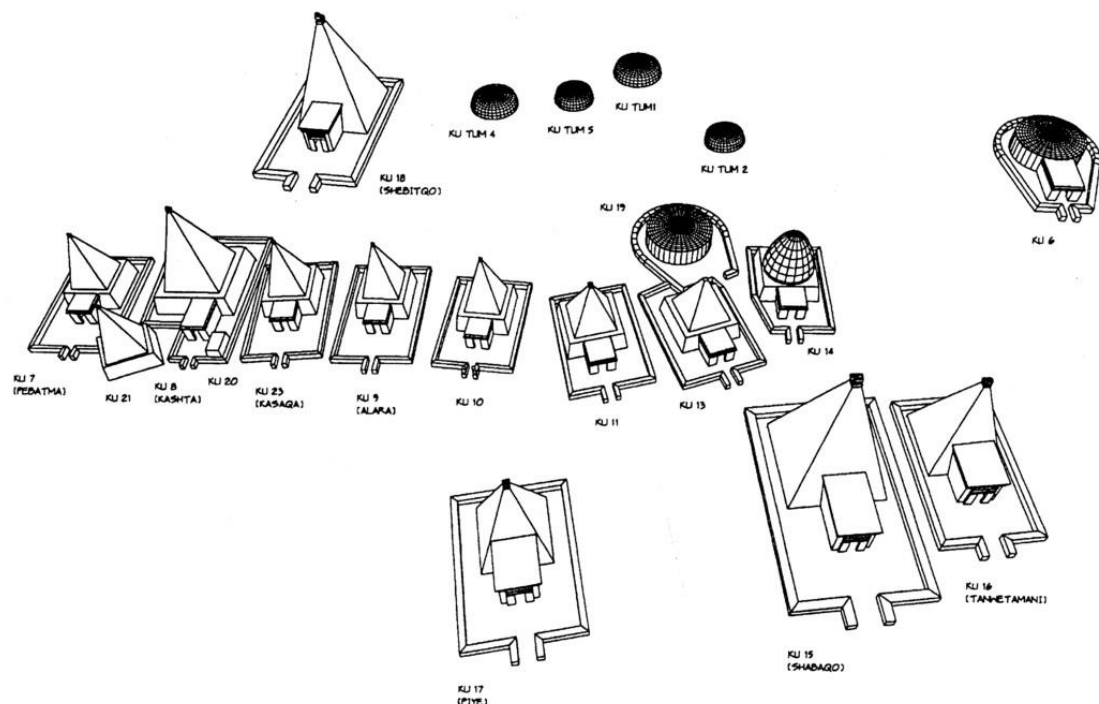


図8 ケンダルが想定するクッルの主要な墓の復元図 (Kendall 1999, Fig.4)

発掘調査報告書の写真や墓の図面などを確認すると、ライスナーがクッルを発掘した時点で、クッルの遺跡は既に荒廃しており、ナパタ末期の Ku.1 と Ku.2 を除けば、上部構造については痕跡のみ確認できる状態がほとんどだったようです。そう考えると、図8の復元図は少々やり過ぎのような気がしますが、新王国時代のエジプトではトゥーム・チャペル (Tomb-Chapel) と呼ばれる小さなピラミッドがついた礼拝施設付きのお墓があり、新王国時代にエジプトの支配下にあったヌビアでも、ナイル川第3急湍のトンボス (Tombos) や第2～3急湍の間に位置するサイ島 (Sai Island) など新王国時代の遺跡で、トゥーム・チャペルが確認されています。ヌビアのピラミッドがエジプトのピラミッドに比べて傾斜角度が大きいのは、ヌビアの地で見る事ができたトゥーム・チャペルを参考にしたからではないか、という研究者もいます。

ただ、ピラミッドを墓の上部構造に導入したピアンキが戦勝碑の記録にあるように下エジプトへ直接行ったのであれば、エジプトのダハシュールやギザの大きなピラミッドを見なかったということはないように思われます。ピアンキの墓の上部構造の基礎は 8m×8m であり、第25王朝やその後のクシュ王のピラミッドに比べても小規模といえます。ピアンキが自らの墓で再現を試みたのはエジプトのピラミッドではなかった、ということが言えるのかもしれませんが。

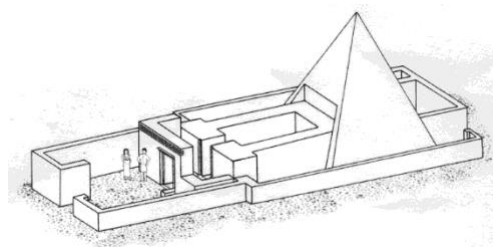


図9 トンボスのトゥーム・チャペル

(S.T.Smith 2003, *Wretched Kush : Ethnic Identities and Boundaries in Egypt's Nubian Empire*, Fig.6.5)

② 下部構造

クッルの墓の上部構造は単純な墳丘墓からマスタバ、ピラミッドのように発展したと考えられていますが、それらの墓の下部構造はどのような違いがあるのでしょうか。

初期の墓である墳丘墓のうち、Ku.Tum.2 の下部構造は単純な土坑墓（報告書ではIという型式）ですが、それ以外の Ku.Tum.1、Ku.Tum.4、Ku.Tum.5 は土坑の長軸に沿って墓の底が袋状に広がった側室を持つ型式の墓（IIという型式）となっていました。この型式IIの墓は A グループ文化（3800-2900 BCE）や C グループ文化の時期から広くヌビアで見られる型式の墓で、クッルでは墳丘墓だけでなく、墳丘とマスタバが組み合わされた Ku.14 や、Ku.9 のアララのマスタバまで（ライスナーの分類では E 世代まで、ケンダルの分類では第1世代まで）、型式IIの墓が見られます。アララの王妃の墓 Ku.23 とカシュタの王妃たちの墓 Ku.20、Ku.21 は、上部構造の違いはありますが、Ku.Tum.2 と同じ型式Iの単純な土坑墓となっています。型式IIはAグループ文化の時期から全ての時代で広くヌビアで見られる墓の型式ですが、王墓地で見られるのはクッルのこの時期までとなっています。

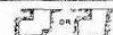
BURIAL CHAMBERS	
I	SIMPLE PIT GRAVE, ORIENTED N-S 
II	PIT and SIDE-CHAMBER, " " 
III	PIT GRAVE, ORIENTED E-W 
IV	SINGLE CHAMBER, CORBEL ROOFED, E-W 
VA	ROCK-CUT, SINGLE CHAMBER
VB	" " , TWO "
VC	" " , THREE "
VI	PILLARED CHAMBERS, 2+3 ROOMS 
VII	NICHED CHAMBERS, 2 ROOMS 
VIII	DROP TYPE CHAMBERS, 1+2 ROOMS 

図 10 埋葬室の型式一覧
(Dunham 1950, Chart II)

Ku.8 のカシュタとカシュタの王妃 Ku.7 の墓は竪穴ですが、それ以前と異なり、埋葬室の面積が大きくなります。カシュタの墓と Ku.7 はどちらも埋葬室の天井部分は壊れていますが、カシュタの墓はおそらく持ち送り積みのヴォールト天井だったと考えられます。この持ち送り積みのヴォールト天井は、ピアンキの墓 Ku.17 やシャバタカの墓 Ku.18 でも採用され、現在でもこの2つの墓でその痕跡を確認することができます。

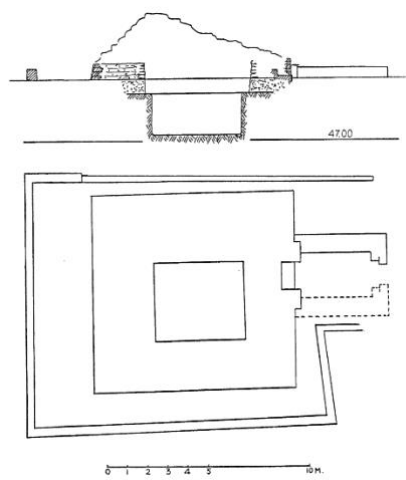


図 11 カシュタの墓の図面（左）(Dunham 1950, Fig.15a)
墓の外観（右上）・竪穴の埋葬室（右下）





図 12 ピアンキの墓 Ku. 17 (左) とシャバタカの墓 Ku. 16 の埋葬室の持ち送り積み天井 (右)
 ※図 13 (ピアンキ) と図 14 (シャバタカ) の墓の図面を参照すると埋葬室と天井の構造が分かる

カシュタの時期までは、堅穴を掘って遺体を埋葬した後に上部構造を造ることが主流でした。それがピアンキの時期からは、地下の埋葬室へアクセスできる階段が墓の手前に造られ、埋葬室の完成を待たずに（生前に）上部構造を造ることができるようになったと考えられています。ただ、ピアンキやシャバタカの墓は、下降階段で埋葬室へアクセスできるようになりましたが、埋葬室自体はそれ以前の墓と同様に地表から堅穴を掘り込み、カシュタの墓でも採用されたと考えられる持ち送り積みのヴォールト天井を持つ構造となっていたため、上部構造から盗掘者が侵入することを許してしまったようです。ピアンキとシャバタカの下降階段は、2007 年時点でほとんど埋まっており、発掘調査報告書の墓の図面と比較することで何となく配置が分かる、といった状況です。

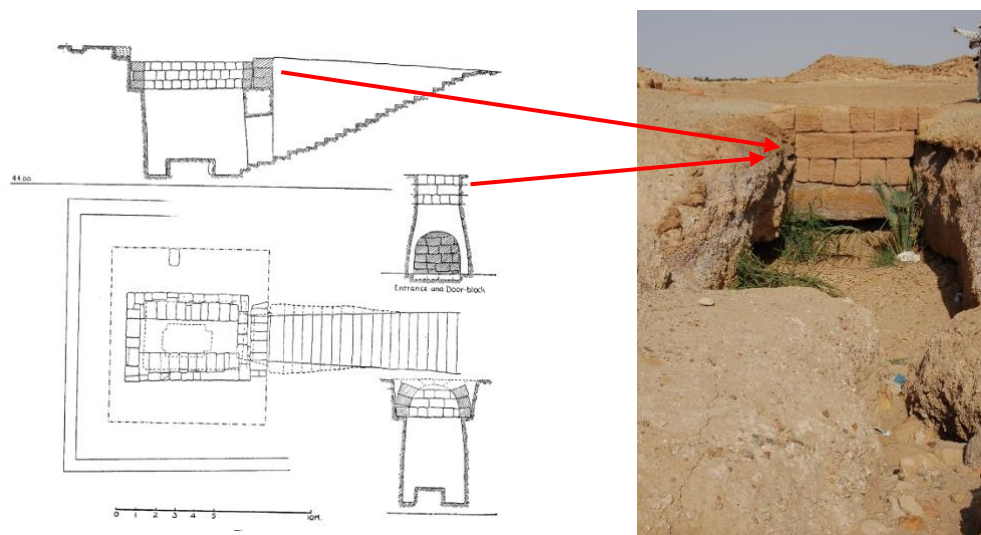


図 13 ピアンキの墓の図面 (左) と、堆積した土砂で階段が見えないピアンキの墓 (右)
 (Dunham 1950, Fig.22a)

※右の写真に写っている石材は、左の図面の埋葬室の入口の上の石材

シャバタカの下降階段は埋葬室に向かって直線ではなく、入口が 90 度に曲がる特殊な階段となっています。シャバタカと同じような例は、クッル以外の墓でも見られず、どのような理由（目的）で建設されたのか非常に興味深いところです。これについて発掘調査報告書では「シャバタカの墓の前に位置するカシュタの墓が障害となって、直線で下降階段を造るスペースがなかったのではないかな¹¹」としています。ただ、シャバタカの下降階段の 90 度に曲がる踊り場のところとカシュタの墓の周壁の間は 10m ほど距離があるため、距離は足りているのではないかと思います。それより不思議なのは、通常、埋葬室に通じる階段は地表から掘り進めていくと思うのですが、このシャバタカの墓の場合は階段の始まり（地表側）で 90 度に曲がっているため、もし意図的に 90 度に曲げたのであれば、堅穴の埋葬室側から岩窟の前室や階段を地表に向けて掘り進め、最後のほうで距離が足りなくなって急に階段の角度を 90 度曲げることになった、という解釈になるのではないかと思います。シャバタカの墓の後ろ側に障害となる建物が何もない、という点や、階段の角度が緩やかな点も非常に気になります。このようにシャバタカの墓は様々なことを考えさせられる非常に興味深い墓となっています。

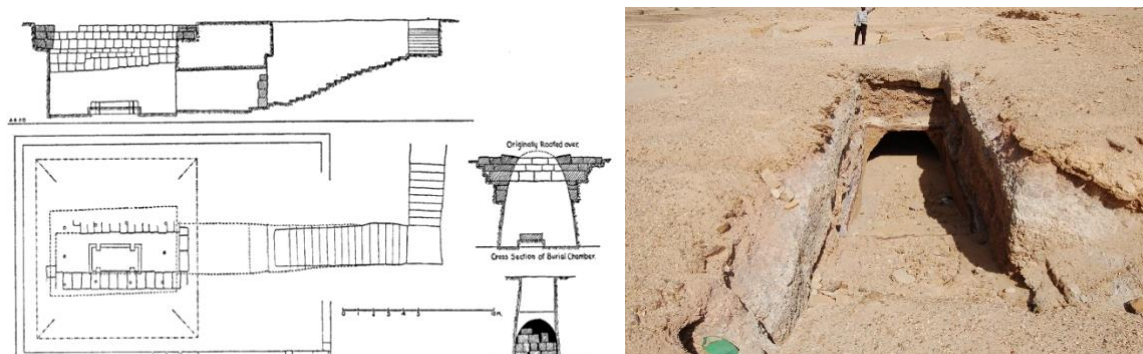


図 14 シャバタカの墓の図面（左）と、堆積した土砂で階段が見えないシャバタカの墓（右）
(Dunham 1950, Fig.23a)

※写真の右手が階段の入口。

埋葬室が堅穴ではなく、下降階段のみアクセス可能な横穴式の岩窟墓になるのは、第 25 王朝のシャバカの墓 Ku.15 からです。ただ残念ながら筆者が遺跡を訪れた 2007 年時点で、シャバカの墓は荒廃が進み、野ざらしにされた下降階段は非常に脆く、また横穴の埋葬室も砂やゴミの堆積が酷く、立ち入れる状態ではありませんでした。

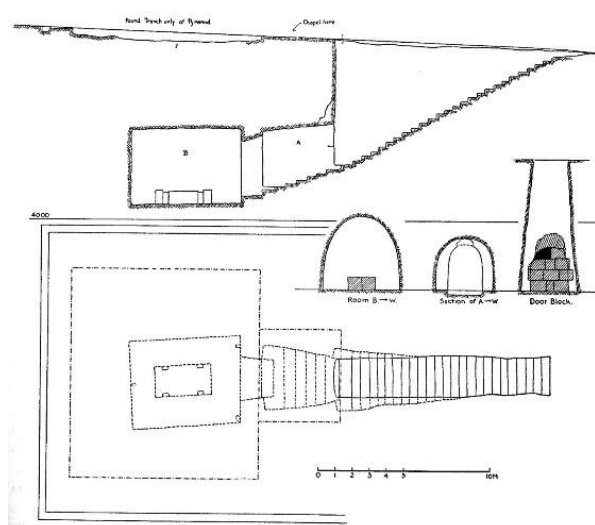


図 15 シャバカの墓の図面（右）
Dunham 1950, Fig.20a)



図 16 シャバカの横穴式の岩窟墓の下降階段（左）と入口（右）

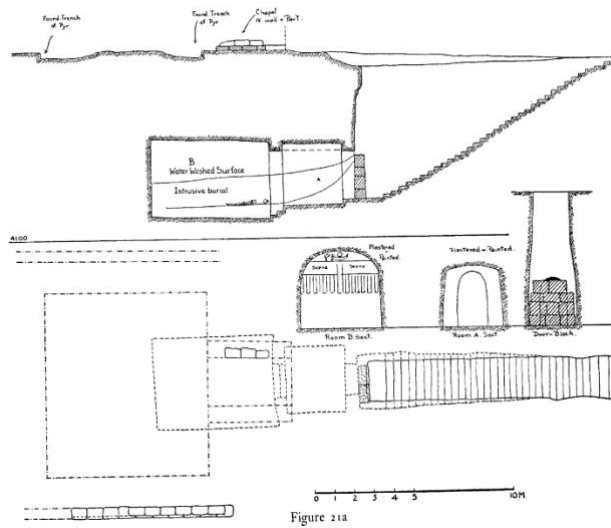
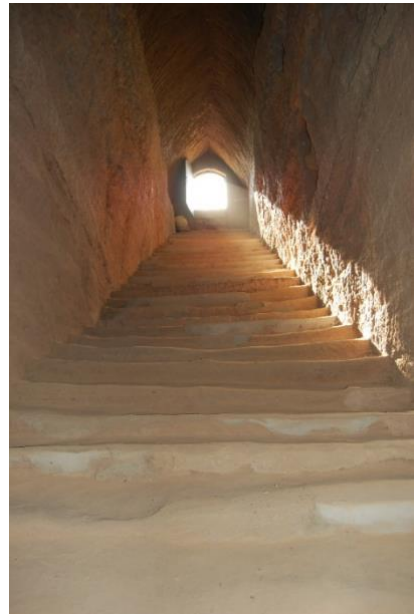


図 17 タヌタマニの墓の図面（左上）と墓内部（Dunham 1950, Fig.21a）

※右上は下降階段、右下は埋葬室の天井壁画（星の装飾）、
左下は墓の保護用の地上の覆い、墓の入口（階段下）、
前室の壁画（埋葬室の入口）



シャバカの墓の隣には息子のタヌタマニの岩窟墓（Ku.16）があり、墓の前室や埋葬室の壁画を見学することができます。第 25 王朝の時期の他の墓と同じく上部構造のピラミッドは残っていませんが、保護用の覆いが下降階段の上に設けられているため、階段の状態は非常に良く、タヌタマニの墓が建造された時に削られた階段の両壁の鑿の刃痕を見ることができます。

図 13 から図 15 の墓の図面を確認すると、ピアンキ、シャバタカ、シャバカの墓の埋葬室に長方形の石製のコフィンベンチがあることが分かります。コフィンベンチはエジプトの埋葬様式を導入したピアンキによって使用が始まったとされており、エジプトのミイラ製作の際に使用される台をイメージしたものと考えられています。ピアンキのコフィンベンチは四つ角に穴が作られており、ここに葬送用のベッドの脚が設置され、ベッドの上にミイラを納めた棺を置いたと考えられています。コフィンベンチは王妃の墓でも確認されており、稀な例としては、シャバタカのコフィンベンチには天蓋用の穴があるそうです。ベッド本体は墓から出土していませんが、青銅製のベッドの脚が出土している墓（Ku.72）もあり、石製のコフィンベンチの上にベッドが置かれていたことは間違いないと思われます。



図 18 Ku. 72 出土の青銅製ベッドの脚

©Museum of Fine Arts Boston,
(Accession Number 21.2815)
※ボストン美術館所蔵品。

遺体をベッドに載せるというベッド埋葬は、ケルマ期（2500-1500 BCE）からヌビアで見られる埋葬方法です。石製ベンチの上にベッドが置かれることについて研究者のケンダルは「エジプトの遺体の保存の概念とヌビアの伝統を融合させた結果、エジプトのミイラ作りの際に用いられる台を受け入れたのではないか」と言っています¹²。

コフィンベンチはタヌタマニの母カルハタの墓（Ku.5）で見ることができます。カルハタの墓もタヌタマニと同じく墓内に壁画が描かれており、構図も非常に良く似ています。



図 19 カルハタ王妃のコフィンベンチ（左）、壁画に描かれたカルハタ王妃（右）

タヌタマニとカルハタの墓内に描かれた壁画は、エジプトの死生観を反映するものの1つですが、発掘調査報告書ではピアンキの王妃ケンサ (Khensa, Ku.4)、シャバタカの王妃アーティ (Arty, Ku.6)、シャバカとシャバカの王妃 (Ku.62)、タヌタマニの王妃 (Ku.61) の墓内にも彩色された壁画や古代エジプトの文字ヒエログリフの跡が見られると記載されています。

5. まとめ

今回は古代エジプトの第 25 王朝のクシュ王たちが眠る王墓地クッルを紹介しました。クッルは墓地としてはお墓の数が少ないのですが、様々な型式の墓があり、墓の配置図や墓の図面を見るだけでも色々な疑問が起こる面白い遺跡です。第 25 王朝の基礎を築いたカシュタやピアンキといったクシュ王たちと、墳丘墓やマスタバなど古い型式の墓に眠る人々との繋がりを示すものは、クッルの発掘から 100 年経った現在も不明です。ただ、エジプトのアメン神を信仰し、エジプトの死生観を信じていたからこそ、ピアンキは自らの墓にピラミッドを採用し、ヌビアの伝統的なベッド埋葬と、ミイラや棺、カノポス壺やシャブティといったエジプトの埋葬様式を組み合わせた新しいクシュの埋葬を創り出した、と考えると、やはりクッルを自らの墓地に選んだことには意味があり、すでにそこに眠る人々とも繋がりがあったと考えるほうが自然ではないかと思います。

第 25 王朝については、近年、王位継承順に関する研究が活発となり、おそらく今後もこれまでの定説が覆ることが予想されます。そういった最新の情報も得ながら、既存の先行研究も調べていかなければいけないと思っています。

今回はクッルの発掘調査報告書を基に、クッルの被葬者や彼らの墓の型式を中心に紹介しましたが、出土品や馬の墓など、まだ紹介できていないことがありますので、次回もクッルの紹介を予定しています。少しでも皆さんがクシュ王国について関心を持っていただけるといいな、と思っています。

参考文献

- Dunham, Dows 1950, *El-Kurru*, (The Royal Cemeteries of Kush Vol.1; Boston, Harvard University Press).
- Emberling, Geoff and Rachael J. Dann 2013, “New Excavations at El-Kurru: Beyond the Napatan Royal Cemetery: Introduction”, *Sudan & Nubia* 17, 42-43.
- Emberling, Geoff, Rachael J. Dann and Abbas Sidahmed Mohamed-Ali 2015, “In a Royal Cemetery of Kush: Archaeological Investigations at El-Kurru, Northern Sudan, 2014-15: Introduction”, *Sudan & Nubia* 19, 54.
- Emberling, Geoff 2015, “Excavation of Pyramid Ku.1”, *Sudan & Nubia* 19, 60-62.
- Kendall, Timothy 1999, The origin of the Napatan state: El Kurru and the evidence for the royal ancestors. In Steffen Wenig (ed.), *Studien zum antiken Sudan: Akten der 7. Internationalen Tagung für meroitische Forschungen vom 14. bis 19. September 1992 in Gosen/bei Berlin*, 3-117. Wiesbaden:

Harrassowitz Verlag.

Payraudeau, Frédéric 2014, “Retour sur la succession Shabako-Shabatako”, *Nehet 1*, 115-127.
https://www.academia.edu/11021678/Retour_sur_la_succession_Shabako_Shabatako_Nehet_1_2014_p_115_127 (accessed July 24, 2022)

Pope, Jeremy 2019, “25th Dynasty”, in Wolfram Grajetzki & Willeke Wendrich (eds.), *UCLA Encyclopedia of Egyptology*, Los Angeles.
<https://escholarship.org/uc/item/69w5x557> (accessed July 24, 2022)

Török, László 1997, *The Kingdom of Kush : Handbook of the Napatan-Meroitic Civilization*, Leiden.

Yellin, Janice W. 2015, “The Pyramid chapel Decorations of Ku.1”, *Sudan & Nubia 19*, 63-65.

坂本翼, 「王家埋葬地から見たクシュの歴史的諸問題」 『西アジア考古学会』 19 号, 2018 年, 47-56 頁。

¹ 第 25 王朝の編年に関しては、誰を最初の王とするか、また王の治世年をどのように計算するのか、ということが研究者間で異なり、文献によって編年は様々です。今回は表 1 で示した王の治世年を基に、近年支持されている王位の順番、シャパタカ、シャバカ（以前はシャバカ、シャパタカの順）、タハルカ、タヌタマニの 4 人の王の治世年を第 25 王朝としました。ちなみに前回タハルカ王のシャブティを紹介した際に参照した展示図録「大英博物館ミイラ展：古代エジプト 6 つの物語」（朝日新聞社, c2021-2022）の編年表では、第 25 王朝は紀元前 716-656 年頃となっています。

² ナパタ期の始まりについては、はっきりした証拠がないため研究者によって違いがあります。今回、ナパタ期とメロエ期の年代に関しては Marjorie M. Fisher (eds.) 2012, *Ancient Nubia: African Kingdom of the Nile*, The American University in Cairo Press, Cairo. を参照しました。

³ International Kurru Archaeological Project の情報は、<https://ikap.us/> で公開されている。

⁴ Emberling 2015, pp.60-62., Yellin 2015, pp.63-65.

⁵ Kendall 1999, pp.3-78, 97.

⁶ 編年に関して代表的なものは、ケンダル (Kendall) の A 世代が紀元前 885 年から始まるという短期編年 (short chronology) と、チュルク (László Török) の A 世代が紀元前 1020 年から始まるという長期編年 (long chronology) である。

⁷ Ku.Tum.2 の周壁はないが

⁸ Kendall 1999, p.4.

⁹ Kendall 1999, pp.26-27.

¹⁰ Kendall 1999, p.4.

¹¹ Dunham 1950, p.67

¹² Kendall 1999a, pp.38-39.